

令和 8 年度入学者一般選抜入学試験問題

(B 日程 人間生活学部 子ども学科)

小 論 文

注意事項

- 1 試験時間は、午前 10 時から午前 11 時までである。
- 2 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 3 この試験では、問題冊子(2 ページ)、解答用紙 1 枚及び下書き用紙 1 枚を配付する。
- 4 試験開始の合図があつてから、解答用紙に**受験番号を必ず記入すること**(氏名の記入は不要)。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に**横書き**で記入すること。所定の解答欄以外に記入した解答は無効である。
- 6 問題冊子及び解答用紙にページの欠落や印刷不鮮明な部分等がある場合は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 7 原則として、試験時間中の途中退室は認めない。
ただし、具合が悪くなった場合、トイレに行きたくなった場合等は、手をあげて、試験監督者がそばに来てからその旨申し出ること。
- 8 試験終了の合図があつたら直ちに筆記用具を置くこと。
- 9 試験終了の合図があつて筆記用具を置いたら、机の上に問題冊子と下書き用紙を重ねて置き、その上に表にした解答用紙を重ねて置くこと。
- 10 試験監督者の許可があるまで退室しないこと。

次の文章を読み、筆者の主張を踏まえた上で、「人を援助すること」と「数字やその使い方を身につけること」のつながりを 600 字以上 800 字以内で述べなさい。

そもそも数字は何のためにあるのでしょうか？あるいは、私たちはなぜ数字やその使い方を身につけるのでしょうか？

算数や数学が苦手な人のなかには、数字なんてなければ小さい頃苦しまなくて済んだのに、と思う人もいるかもしれません。好きにしる嫌いにしろ、数字やその性質、あるいは数字を使ってできることについて私たちは義務教育のなかで必ず学びます。根本的な言い方をすれば、私たちが住んでいる世界やそこでの経験が、すでに数字によって成り立っています。それは、私たちが生まれるよりずっと前からそうです。

私たちを取り巻く物理的な環境について考えてみましょう。私たちは家に住み、道路や橋、鉄道などの公共的な建造物を使い、学校や会社などの建物のなかで長い時間を過ごします。それらはすべて、少なくとも現代社会では数量的な計測や規格がなければ建造することができません。ハードウェア（建物）のみならず、ソフトウェア（規範、制度）も同じです。学校で何年過ごし、どれくらいの時間を何の学びで費やすのかは、教育制度が決めています。働いている人の給料の基準もまた、勤続年数などの数値を使って算定されます。私たちは、生まれたときには複雑な数字の概念を持ちません。しかし、いやおうなしに数字によって構成された世界に埋め込まれていくのです。

数字は、私たちのアイデンティティをも形成します。現代社会では、私たちのほとんどは自分の年齢を知っています。そして、年齢は私たちの自己認識の重要な部分を占めます。することができる経験（たとえば飲酒）も、利用できる制度（たとえば結婚）も、年齢に左右されます。教育年数、勤続年数といった数値も、私たち個人を構成する重要な数字の部分です。

私たちは、現代社会に暮らす以上、数字から逃れることはできません。すでに述べたように、私たちの住む環境には数字が深く埋め込まれていて、それを抜き取って世界を再構築することなど、もはやできないからです。

といったわけで、最初の問いのうち、「なぜ私たちは数字やその使い方を身につけるのか？」については、環境に馴染むため、そこで上手くやっていくため、という答えが得られます。ただ、これは「数字は何のためにある？」という問いへの答えではありません。数字が何であるのかという問いへの一番シンプルな答えは、それが私たちの生活にある程度よいものにしてくれるから、ということになります。

ただ、数字が構成する私たちの生活環境と私たち個々人のあいだの関係は、あまり良好なものとはいえません。私たちは数字に追われ、悩まされることも多いものです。

（中略）

同様に、私たちは数字を駆使して、以前よりも圧倒的に安全で豊かな環境を作り上げました。数字の駆使がなければ、私たちの経済活動の基盤が失われてしまいます。しかし数字で規定されたその環境は、いったん出来上がってしまうと、なんとも不自由な「枠」として私たちの行動を縛ることがあります。

たとえば教育年限です。日本では、1947 年公布の学校教育法の施行以来、初等教育に 6 年、前期中等教育に 3 年の計 9 年が義務教育となりました。これが教育の基本的な「外枠」になって

います。しかしこの枠は、多様な子どもの実態からすれば不自由なものです。9年間の定型的な教育内容が、一部の子どもにとっては最適な期間ではないこともあるでしょう。もしかすると6年で修了して次のステップに進んだほうがよい子どももいるかもしれません。

いっそのこと教育の長さを数字で規定しないようにして、個々の子どもの特徴に寄り添ったほうがいいのではないかと。教える内容のステップを、もっと個々の子どもの能力に即して変え、優秀な子どもはもっと早く義務教育を修了させたほうがよいのではないかと。あるいは、実家の家業を継ぐことが決まっているのなら、いっそのこと義務教育を受けないことも許可すべきではないのか？

しかし、社会全体でみたとき、決まった数字の枠を外すことはたいへんな損失になりえます。なにしろ、能力や適性というのは曖昧なものです。また、個々の子どもが置かれた家庭環境もまた、複雑なものです。教える側にとっても、「この子は一定の段階を脱したから次のステップに」「この子には義務教育の必要性は薄いのではないかと」といった判断を個々に行うことは、きわめて手間と時間のかかる作業になります。動かせない外枠があるからこそ、そこで活動する人たち（ここでは教員）はその他の仕事、たとえば教育方法の改善に力を注ぐことができるのです。

それに、判断基準が曖昧ななかで個別の判断を行うことは、もっとひどい事態を呼び込むことにもつながります。たとえばえこひいきです。会社での人事評価もそうですが、個々人の能力やパフォーマンスを客観的に判断することが難しいため、あまり本質的ではない要素が判断に紛れ込むことがあります。従順であるとか、容姿が好みであるとか、家族が名家であるとか、そういう外在的な事情が人を差別的に取り扱う理由になりえます。義務教育の「9」年というそっけない数字は、それ自体真に妥当で適正な数値であるかどうかはわかりません。ヨーロッパでは10年以上の国が多いようです。しかしそれでも、外枠としての規定の数字は、ないよりはずっと社会の運営をスムーズにします。それにより、個々人の幸福に結びつく側面も当然あるはずなのです。

出典：筒井淳也（2023）『数字のセンスを磨く データの読み方・活かし方』光文社（一部改変）